



おじゃまします

さかき新企業人インタビュー⑯

## 株式会社キック

なかじょうかずひこ  
中城和彦さんプロフィール

昭和46年生まれ。上田染谷丘高校普通科卒業後、アルプス証券（現八十二証券）に入社、以後、住友電工、戸倉の児玉製作所を経て㈱イケダへ。そこで本格的な金属加工と出会い、製作現場を8年、営業畑を5年経験し、2009年4月、キック設立。創業3年だが、「業績は堅調です。隙間産業にうまくハマりました」（中城さん）。名刺に「削り屋」とある。どんなものでもどんな形にも削り出すという職人としての自負心だろう。趣味は20年来のゴルフ。社員3人でラウンドすることもあるそうだ。

起業3年、堅調に売り上げを伸ばす  
次世代金属加工業を担うホープ

高校を出て就職する際、「スーツをビシッと決めた仕事に憧れ」証券会社に入社した。世はバブル全盛期。しかし入ってすぐ、バブル崩壊に直面。「これからは手に職がなければ」と製造業に転向し、作り手として現場の最前線に立つ。専門知識がないぶん、「死に物狂いで勉強した」という。その甲斐あって若くして独立を果たす。顧客のニーズを把握する営業マン時代の経験は、今もものづくりに生きている。

——これまでの経歴をお聞かせください。

「実家は坂城で農業をしています。高校を出て最初に勤めたのは証券会社でした。ちょうどバブルの時代で証券会社は人気の職種でしたね。営業職を2年ほど勤めましたが、手に職をつけたいと思い、製造業に転職しました。住友電工を皮切りに数社会社を変えましたが、地元の㈱イケダの社長に声をかけてもらって、そこではじめて金属加工の世界に飛び込みました。この世

界に入るきっかけをいただいた社長には感謝しています」

——ようやく生涯の仕事にめぐり合ったという感じですね。

「面白い仕事ですね。物づくりは本当におもしろい。どうやって削るうか、夢に出てくるぐらい悩むことも多いのですが、図面通りに出来上がったときの充足感が、たまらないですね」

——3年前にご自身の会社を興された。

「ええ、自分なりにできることがあるのではないかと、当時の仕事仲間（専務の高野圭司さん）と私の家内（郁美さん）の3人で会社を立ち上げました。キックという社名は3人の頭文字を取って『KIK』。でも読めないのかカタカナでキックにしました（笑）」

——金属加工という仕事はどのようなものですか

「簡単にいうと金属の塊を様々な形に削り出して製品を作るといことです。ある部品を作るのに、CAD・CAMでプログラムを組んでマシンングセンタという機械で削り出します。現在は主に自動車部品、医療機器などの試作

品のための部品が多いですね。少人数ですから1日でできる個数は5〜10個ほど。数をこなすことはできませんが、逆に少ない個数のリクエストに応えられるという強みはあります。変な言い方ですが、規模が大きな事業所が敬遠する『隙間』の仕事にうまくハマッタといったところでしょいか。おかげさまで業績は堅調です」

——これからの展望は？

「会社の規模を大きくするといったことは今のところ考えていません。リーマンショックや東日本大震災もあって、全く予想がつかないですよ。ですから今はお客様の信用を大切に、信頼される仕事を着実にこなしていくことしか頭にありません。ただ、物づくりに携わるものとして、いずれはメーカーになればいいなあとは思っています。チャンスがあれば、自社のブランド商品を世に出したいですね」